

児童期の異文化接触に伴う民族アイデンティティの発達

—サードカルチャーキッズの日本人青年の分析—

福井亜由美・岡本祐子

The effect of cross-cultural experience during school-age to ethnic identity development:
Analysis of Japanese Adult Third Culture Kids

Ayumi Fukui and Yuko Okamoto

The experience of transferring from one culture to another during childhood can represent a crisis of identity for some individuals. “Third Culture Kids” are children who grew up outside their parents’ culture during their developmental years, leading them to develop a third cultural perspective. Previous studies have reported that the experience of transferring to different culture is often accompanied by identity-related difficulties. Ethnic identity is an aspect of collective identity that plays a particularly important role among members of cultural minority groups. Stable ethnic identity can help members of cultural minorities form identities and maintain stable mental health. Family relationships also play an important role in identity. The current study had two main aims: (1) examining the relationships between ethnic identity, identity scale scores, general health questionnaire scores, and background factors, and (2) examining family relationships among people in Japan who experienced a cross-cultural transition during school age. The results revealed two important characteristics for adaptation and the development of identity: experiencing cross-cultural transition during early school age (6-12 years old) affect ethnic identity development as Japanese, and stable environment, including family relationships, and having a concept of ethnic identity from early childhood.

キーワード : ethnic identity, TCK, Japanese, school-age.

問 題

発達途上のうちに両親の国以外に滞在し、母国や滞在国のものとは異なる視点や文化を身につけた者をサードカルチャーキッズ (Third Culture Kids; Pollock & Van Reken, 1999 ; 以下 TCK) と呼ぶ。Erikson (1964) は、異文化へ移動する者に生じる心理的状态を「根こぎ感」と呼び、そのアイデンティティの感覚の脆弱性について述べている。一時的にせよ、掘って立つ大地を失い根無し草となることが基本的な安定感を揺るがすため (河合・藤縄, 1980), 母国と異なる文化へと移動することで行われる異文化接触は、幼児期の分離—個体化の過程で経験する喪失を再体験する可能性がある。

この体験から精神疾患様症状を表出した事例も報告されている（江淵，1982；延島，1963など）。

異文化への適応に成功すれば異文化適応となるが、失敗すればカルチャーショックとして異文化接触の体験がなされる。病的に扱われがちなカルチャーショック（Oberg, 1960）だが、Adler（1975）はカルチャーショックを新しい文化の学習と個人の人間の成長という視点から捉え、異文化理解だけでなく自己理解の深化とそれに基づく変容をもたらす学習経験と捉えた。Kim（1976）は異文化接触を「新しい文化を学習し、そこに適応していく過程はライフサイクルを再び始めるようなもの」であり、「誕生に始まり、各発達段階を得るという人生周期の収縮版」であると述べている。Morschauer & Chescheir（1982）も、留学や転勤などの移住者に対して、新しい土地に適応していくためのライフサイクルを繰り返すような教育治療的枠組みを示している。

日本は島国で、大多数が比較的安定した文化的・民族的な構造内でマジョリティのため、新しい文化に適応しにくいと言われている（中根，1972；近藤，1981）。フランスで11年間海外邦人を対象に見た精神科臨床の累計結果から、海外渡航自体が持つ心理面へのリスクが推察されている（鈴木・立見・太田，1997）。母国を離れて新たな文化に接触することでアイデンティティが危ぶまれる報告も多数なされている（Erikson, 1959；渋沢，1993など）。こうした問題を踏まえ、異文化間カウンセリングの必要性や（白土，2004）、多文化間メンタルヘルスの必要性が指摘されるなど（阿部，2001）、異文化接触者の心理的サポートが注目されている。異文化接触によって精神科を受診しているのは実勢の1/3程度であるという知見や（鈴木他，1997）、2016年に海外在留邦人が133万人を超えたことから（外務大臣領事局政策課，2017）、今後ますます需要が増えることが予測される。このことから、異文化接触者の精神的健康に関する研究は必要であると考えられる。

植松（2015）は異文化とアイデンティティの問題を、集団アイデンティティと個のアイデンティティの視点から考察することを提案し、文化的マイノリティ青年にとって重要な集団アイデンティティは民族アイデンティティであるとしている。Phinney（1992）が開発した多民族アイデンティティ尺度（Multigroup Ethnic Identity Measure；以下MEIM）を用いた研究から、民族アイデンティティと異文化適応は深い関連があることが明らかにされている（Mendelberg, 1986；Parham & Helms, 1985；Phinney, 1991；Phinney, Lochner, & Murphy, 1990；Yasui, Dorham, & Dishion, 2004；Phinney, Jacoby, & Silver, 2007；Yip & Fuligni, 2002；Lee & Yoo, 2004；Ong, Phinney, & Denis, 2006）。

文化間移動は子どもの発達課題の順序に影響を及ぼすと言われており（McDonald, 2010）、それにより困難を抱える可能性もあるという（Pollock & Van Reken, 1999）。特に児童期は、「集団内で自分を差別化してユニークな自分を表出するというよりは、集団との同一化を図りながら、個人のアイデンティティが構築される時期」（塘・廿日出・小澤・鈴木，2008）である。その様な時期に複数の文化、言語を習得することは、早くから一つの文化では適応できない現実があることに気づかされ（LaFromboise, Coleman, & Gerton, 1993）、自身を差別化してユニークな自分を表出する体験を思春期よりも早く行うこととなる（渋沢，1993）。また、社会的に良しとされる行動が、環境が変わることで変化し、自身の中の道徳が不安定となることも実験により示されている（LeTender, 2000）。

異文化接触者を考察する際に重要な概念として、文化的アイデンティティがある。これは、特定の環境に住む集団において共有されている多側面に渡る意味空間を内的に取り込み、自身の行動を

動機づけるものである(箕浦, 2003)。箕浦(2003)は、文化的アイデンティティを築く期間として9～15歳が最も重要であると推定しており、15歳以降に異文化接触を行っても、すぐに異国の文化文法に染まることはないという。必要に迫られて外見上の行動のみが変化することはあっても、情動や認知という深い部分は母文化に親しみを感じるのである。

文化的アイデンティティを保有することは心理的な幸福感に繋がることが報告されているが(LaFromboise et al., 1993)、多文化的環境で育った者は、所属する文化に関するアイデンティティを保有することに困難さを抱くことが指摘されている(Hogg & Mullin, 1999; Sussman, 2000, Vivero & Jenkins, 1999)。異文化接触は、新しい環境に馴染もうと文化変容に努めて新たなアイデンティティを構築することであり(Hogg & Mullin, 1999; Phinney, 1990; Ryder, Alden, & Paulhus, 2000)、移動する個人が一つの文化的アイデンティティを保有することは難しい(Sussman, 2000)。多文化的環境で育った者は多文化を内的に保有するため(Hoersting & Jenkins, 2011)、どの文化にも調和するようなアイデンティティを形成し(Benet-Martinez, 2000)、アイデンティティに組み込まれた複数文化(Hong, Morris, Chiu, & Benet-Martinez, 2000)を文脈に沿って視点を切り替えるため(Ryder et al., 2000)、どの文化を自己とするべきか混乱を示す場合もある(Vivero & Jenkins, 1999)。このような第3の文化を身につけたTCKは、どの文化に対しても、受け入れられている、所属していると感じられず、代々続く民族アイデンティティを伝えて適所(Erikson, 1959)を探し求めて葛藤する(山本, 1984)。このことから、文化的に混乱する可能性の高い複雑な背景を持つ青年にとって民族アイデンティティが重要になると考えられる。

TCKの背景は実に多様で、滞在国(朴, 2011)や、学校形態(江淵, 1983, 2002; 岩崎, 2008)を含む環境(山口, 2007)など、同じ帰国生というジャンルでも背景要因によって差別化が重要である(渋谷, 2000)。これらの点を踏まえ、本研究では、多文化的背景を持つ日本人TCKの民族アイデンティティに焦点を当てることとする。両親とも日本人で、国籍が日本のTCKのみを対象とするため、複数文化に関わりがあっても軸は日本となることが予測される。そこで、対象者の民族アイデンティティが、日本と滞在国との文化を経験したことでどのように揺さぶられ、築かれるのかを調査することを目的とする。

集団アイデンティティの獲得には家族との関係が重要である(橋本・西川・河野, 1991)。Jacobson(1964)は、集団アイデンティティの問題を有する青年に見られる特徴として、自己愛的な態度、情緒の不安定さ、その時々環境によって意見が流動的となるような価値観の非一貫性を報告している。こうした問題は、子供の二次的集団に所属することを親が妨害している場合が多いと考えられている(Jacobson, 1964; Phinney & Nakayama, 1991; Downie & Koestner, 2004)。Nathanson & Marcenko(1995)は、子どもが異文化接触の際に健康的に過ごすためには、家族が最も重要な役割を果たすことを報告している。渋谷(1993)は精神療法を必要とする帰国生の共通点として、文化的葛藤に加え、それぞれの発達段階の課題達成に必要な個人の内的資源と家族のサポートの欠如を挙げている。アメリカの異文化接触経験がある子どもや青年と、異文化接触経験のない子どもや青年の家族関係について調査した研究において、異文化接触のない群の方が家族仲が親密であったことが報告されている(Gerner, Perry, Moselle, & Archbold, 1992)。このことから、異文化接触が行われ

ている場合の家族関係は、そうでない家族と質が異なることが推察される。異文化接触者の精神的健康を保つためには家族等の環境サポートが必要不可欠であると考え、本研究でも家族がサポート源として機能しているか考慮することとする。

以上より、本研究は日本人がアイデンティティ確立前の児童期に異文化接触をした経験が個人の民族アイデンティティ発達にどう影響するか、彼らの背景要因ごとに検討することを目的とする。

研究 I

目的

本研究は、幼児期から思春期の間異文化接触を経験した日本人帰国生の民族アイデンティティ、アイデンティティ、精神的健康の関連性を検討することを目的とした。仮説として以下5つを設定した。(1) 海外生活体験がない者より、異文化に滞在していた者の方が民族アイデンティティの達成度 (MEIM) が高くなる、(2) 民族アイデンティティの達成度 (MEIM) が高い者ほどアイデンティティの達成度も高い。(3) 民族アイデンティティの達成度 (MEIM) が高い者ほど精神的健康の達成度が高い。また、滞在先での要因も重要な変数となることが予測されるため、(4) 日本から物理的に遠い環境にいた者ほど民族アイデンティティの達成度 (MEIM) が高い、そして (5) 長く海外に滞在していた者ほど民族アイデンティティの達成度 (MEIM) が高い。

方法

調査対象者 帰国生が多い私立中高一貫校の中学3年生以上と、帰国生が多い私立大学に通う学生、254名。国内群として、海外滞在歴のない、本人も両親も日本国籍を有している112名。帰国生群として、15歳までに1年以上の異文化接触経験があり、帰国後1年以上経過している124名。危機的体験後に出来事を内的に統合する「心の統合期間」(大塚, 1992)が1年以上必要であることから、民族アイデンティティについても整理する時間が一定期間必要であると予測し、異文化の滞在歴と帰国後の年数が共に1年以上である者を対象とした。また、アイデンティティ調査の多くが15歳以上を対象としていることから、15歳の学生が多く存在する中学3年生以上を対象とした。

質問紙 (1) MEIM (Multigroup Ethnic Identity Measure ; Phinney, 1992 ; Roberts, Phinney, Masse, Chen, Roberts, & Romero, 1999) を参考に邦訳された10項目4件法(植松, 2010)。(2) 多次元自我同一性尺度 (MEIS ; 谷, 2001) 20項目7件法。(3) General Health Questionnaire 12項目日本語版 (GHQ ; Goldberg, 1971 ; 中川・大坊, 1985)。(4) フェイスシートは回答者が本研究の対象者となるかを定めるべく以下の質問項目を設定した。年齢、性別、回答者の国籍、回答者両親の国籍、現在までの移動歴。そして、面接調査への参加可否について尋ねた。

私立中高一貫校では担任からホームルームにて質問紙を配布してもらい、後日回収したものを筆者に郵送してもらった。私立大学では授業時間内に筆者が配布、回収を行った。

調査時期 2018年5月1日～6月13日。

分析ソフト 分析ソフト HAD。データ管理と分析のため MacBook Air と、acerV246HL を使用した。

結果

各尺度の因子構造と信頼性を検討した。MEIM は 10 項目 ($CFI=.881$, $RMSEA=.106$, $AIC=136.435$, $BIC=203.419$), MEIS は 20 項目 ($CFI=.933$, $RMSEA=.083$, $AIC=458.752$, $BIC=718.447$), GHQ は 12 項目 ($CFI=.822$, $RMSEA=.107$, $AIC=230.854$, $BIC=273.063$) を採用することとした。

国内群より帰国生群の MEIM が高くなるという第 1 の仮説を検証するため、MEIM 合計点を目的変数に、帰国生群と国内群の対応のない t 検定を行った。その結果、 $t(248) = .722$ で有意差は見られなかった (Figure 1)。

帰国生群の MEIM 得点が高いほど、アイデンティティの達成度が低くなるという第 2 の仮説を検証するため、帰国生群の MEIM 合計点と MEIS 合計点の相関分析を実施した。結果、 $p < .10$ で有意傾向が示された。有意傾向が示されたことから、MEIM 合計点を従属変数に MEIS 合計点との回帰分析を実施した (Table 1)。結果、 $\beta = -.729$, $p < .05$, $R^2 = .023$ で、有意傾向が見受けられた。よって、仮説 2 を支持する可能性が示唆された。

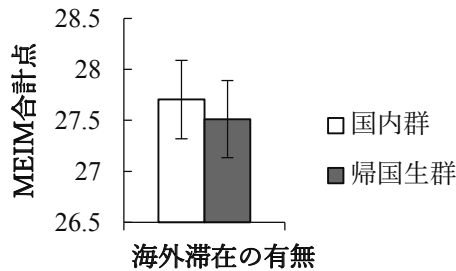


Figure 1. 国内群と帰国生群の MEIM 合計得点

Table 1

帰国生群の MEIM 合計点が MEIS 合計点に与える影響 (単回帰分析)

変数名	MEISsum
MEIMsum	-.151 +
R^2	.023 +

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

帰国生群の MEIM 得点が高いほど精神的健康も高くなるという第 3 の仮説を検証するため、MEIM 合計点と GHQ 合計点の相関分析を実施した。有意な結果は見られず、仮説 3 は支持されなかった。

背景要因によって MEIM 得点が変わるという第 4 の仮説を検証するため、MEIM 合計点と、滞在していた国、通っていた学校形態の相関分析を実施した。結果、有意な差は見られなかった。滞在期間によって MEIM 得点が変わるという第 5 の仮説を検証するため、MEIM 合計点と滞在年数、滞在時期との相関分析を実施した (Table 2)。滞在時期は 0-5 歳を [幼児期]、6-12 歳を [児童期]、13-

18歳を〔思春期〕とした。その結果、海外に長く住んでいた者ほどMEIM合計点が低くなり、特に〔児童期〕に長く海外滞在していた者ほどMEIM合計点が低くなることが示された。そこで、MEIM合計点を目的変数に、滞在年数と〔児童期〕の滞在年数の重回帰分析を実施した（Table 3）。結果、 $R^2=.056$ で、滞在年数は $\beta=-.177$, $p>.10$ であり、児童期は $\beta=-.193$, $p=.403$ で有意な結果は見受けられなかった。第4の仮説は支持されず、第5の仮説に関しては仮説と反対の結果が示された。

Table 2

帰国生群のMEIM合計点と滞在年数・滞在時期の相関分析

	MEIM合計点
滞在年数	-.225 *
幼児期	-.089
児童期	-.214 *
思春期	-.035

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

Table 3

帰国生群のMEIM合計点が滞在年数と児童期滞在年数に与える影響（重回帰分析）

変数名	MEIMsum
滞在年数	-.148
児童期	-.107
R^2	.056 *

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

考 察

海外滞在歴と民族アイデンティティの関係

国内群よりも帰国生群のMEIM得点が高くなるという第1の仮説を検証するため行ったt検定の結果（Figure 1）、有意な差は見られなかった。また、海外に長く滞在していた者ほどMEIM得点が高くなるという第4の仮説検証のために実施した相関分析の結果（Table 2）、海外に長く住むほどMEIM合計点が低くなるという仮説と逆の結果が示された。児童期は、集団との同一化を行う時期であり、その時期に海外へ滞在した者は、海外文化にて社会化を達成していた可能性が推察される（箕浦, 1980）。その結果、日本人としての民族アイデンティティが発達しにくかったことが予想される。実際、帰国後にカルチャーショックを経験した帰国生の事例も報告されており（小澤, 2000）、帰国生、あるいは外国人として日本人との差別化が行われた可能性が考えられる。

帰国生の民族アイデンティティとアイデンティティの関係

民族アイデンティティの確立度合いが高い者ほどアイデンティティも安定しているという第2の仮説を検討するために実施した、帰国生群のMEIM合計点とMEIS合計点の相関分析の結果（Table 1）、有意傾向が示された。重回帰分析からもMEIMがMEISに与える影響が示唆された。帰国生の

アイデンティティにとって民族アイデンティティは重要な要素である可能性が推察される。しかし、結果が有意傾向であったことから今後さらなる検討が必要である。

帰国生の民族アイデンティティと精神的健康の関係

民族アイデンティティの確立度が高い者ほど精神的健康も安定しているという第3の仮説を検討するために実施した、帰国生群のMEIM合計点とGHQ合計点の相関分析の結果、有意な結果は示されなかった。本研究の対象者は、海外滞在歴と帰国後の年数が共に1年以上の、両親が日本人の日本国籍を保有する日本人帰国生とした。そのため、帰国後の年数を統制しておらず、対象者の中には帰国後10年以上経過している者も含まれる。そのような対象者にとって、精神的健康の安定に民族アイデンティティはそれほど重要でないとも考えられる。

帰国生の民族アイデンティティと滞在先での要因との関係

第5の仮説を検討するため実施したMEIM合計点と滞在していた国や学校形態の相関分析の結果（Table 3）、相関は見られなかった。このことから、滞在していた国や学校形態そのものが民族アイデンティティに与える影響する可能性は示されなかった。

研究 I のまとめ

研究 I では、アイデンティティを構築する思春期以前に異文化接触した経験を持つ日本人帰国生を対象に民族アイデンティティに影響する要因を調べるべく、アイデンティティ、精神的健康、海外滞在の背景的要因との関連を数量的に検討した。その結果、児童期に海外滞在している場合は日本人としての民族アイデンティティが保有されにくいことが示された。日本人としての民族アイデンティティが構築されるためには、海外滞在時期が重要な要因となることが示された。児童期は社会化に重要な時期であり、そのような時期に海外へ渡ると滞在先で社会化がなされるためである。

今後の課題として、対象者の帰国後の年数を統制することが挙げられる。本研究では、帰国生のアイデンティティにとって民族アイデンティティが重要な要素となることも示唆されたが、あくまでも結果が有意傾向であった。また、先行研究にて関連が示された精神的健康との間に有意差が見られなかった。これは、帰国後1年しか経過していない者から10年以上経過している帰国生徒の差別化を行っていないことが影響していると考えられる。

研究 II

目的

研究 II では、民族アイデンティティと家族関係の良好さとの関連性について検討することを目的とした。マイノリティ青年が民族アイデンティティを獲得するためには親の存在が重要であり（Jacobson, 1964 ; Phinney & Nakayama, 1991）、子どもの二次的集団への所属を親が妨害することによりアイデンティティの問題が生じる事例も報告されている（Defontaine, 1991 ; 渋沢, 1993）。このことから、家族関係と対象者の民族アイデンティティには関連があると考え、家族関係が良好な者ほど民族アイデンティティの達成度が高いと予測した。渋沢（1993）に倣い、本研究ではKFDを用いて対象者の家族の関係性を検討した。

方 法

対象者 研究 I と同様の対象者 207 名。帰国生群 99 名，国内群 108 名。

質問紙 (1) MEIM (Phinney, 1992 ; Roberts et al., 1999) を参考に邦訳された 10 項目 4 件法 (植松, 2010), (2) MEIS (谷, 2001) 20 項目 7 件法, (3) GHQ (Goldberg, 1972 ; 中川・大坊, 1985), (4) 研究 I と同様のフェイスシート, (5) Kinetic-Family-Drawing (KFD: 動的家族描画法; Burns & Kaufman, 1970)。KFD は「あなたを含むあなたの家族全員が何かしているところを描いてください」と教示し，注意として「①棒人間ではない完全な人間を描いてください，②誰か (年齢も) 教えてください，③それぞれの人が何をしているところかも説明をお願いします，④鉛筆を使ってください。ペンなどで色は塗らないでください，※上手下手を見るものではありません。自由に描いてください」と記述した。そして，教示文を載せた紙とは別の白紙ページに KFD を描いてもらった。

調査時期 2018 年 5 月 1 日～6 月 13 日。研究 I と同時に配布を行った。

分析ソフト 分析ソフトとして HAD, データ管理と分析のため MacBook Air と acerV246HL を使用。

結 果

描画内容の検討

各描画における特徴を次の項目でまとめた。顔が描かれている成員が笑顔である [笑顔]，グッドイナフ人物画知能検査の得点を表す [グッドイナフ]，父親の描写に不穏な点がある [Fa 不穏]，母親の描写に不穏な点がある [Mo 不穏]，自分の描写に不穏な点がある [自分不穏]。なお，[笑顔] が多いほど得点は高くなる。グッドイナフ人物画知能検査は，得点が低くなるほど発達に遅れがあるという判断がなされる。本研究においても，グッドイナフ検査より逸脱している描画ほど [グッドイナフ] が低くなる。そして，不穏な点として，描画法においてマイナスであることが多いとされる項目の含まれた描写を採用した (後ろ向き，囲まれている，主な成員から著しく離れている，水回りにいる，刃物を持っている)。

MEIM, MEIS, GHQ の合計点，海外経験の有無と，先に述べた描画における特徴の相関を検討するべく相関分析を実施した (Table 4)。MEIM 合計点と [笑顔] に相関が見られた。MEIS 合計点とは [笑顔] に負の，[自分不穏] に正の有意差が示され，[Fa 不穏] に有意傾向が示された。GHQ 合計点とは [笑顔] と [自分不穏] に有意差が見られた。海外経験と [グッドイナフ] に有意差が示された。そして [Fa 不穏]，[Mo 不穏]，[自分不穏] との間に有意差が示された。

Table 4

KFD の特徴と各尺度との相関分析

	MEIM合計点	MEIS合計点	GHQ合計点	海外経験	Fa不穏	Mo不穏
笑顔	.197 **	-.168 *	-.172 *	.032		
グッドイナフ	.025	.060	.019	.146 *		
Fa不穏	-.050	.136 †	.068	.037		
Mo不穏	.004	.088	.073	.045	.469 **	
自分不穏	-.072	.172 *	.140 *	.019	.466 **	.352 **

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

海外滞在歴の合計年数、各発達段階における海外滞在年数、描画における特徴との相関分析を実施した。0-5歳 [幼児期]、6-12歳 [児童期]、13-18歳 [思春期] とした (Table 5)。[知能] と海外滞在歴合計との間に有意差が示され、[Mo不穩] と [児童期] の間に有意傾向が示された。

Table 5
KFD の特徴と海外滞在時期との相関分析

	笑顔	知能	Fa不穩	Mo不穩	自分不穩
海外滞在歴合計	-.006	.118 ⁺	.089	.102	.058
幼児期	.052	.105	.060	.045	.075
児童期	.011	.112	.059	.120 ⁺	.022
思春期	-.047	.028	.012	-.023	-.018

** $p < .01$, * $p < .05$, ⁺ $p < .10$

印象の分析

描画法は、同じような絵でも描画者の背景要因や、微妙な違いなどによって解釈が全く異なることがあるため (高橋・高橋, 1986), 描かれている内容だけでなく描画の印象も検討することとした。大和田・阪 (2007) の KFD 印象評定尺度 (34 項目 7 件法で, [安定・統合性], [活動・表出生], [親密生] の 3 因子) を用い, 筆者と心理臨床学コースに所属する院生 2 名で評定を行なった。

評定された 34 項目の因子構造と信頼性を検討し, [安定・統合性] 7 項目, [活動・表出生] 9 項目, [親密生] 10 項目が採用された (Appendix 4)。評定者別に α 係数を求めたところ, 十分な信頼性が確認された ([安定・統合性] .74~.86, [活動・表出生] .83~.90, [親密生] .87~.92)。

各項目の評定値は, 評定者 3 名による評定値の平均値とした。各因子の評定値は, 得点が高いほど [安定・統合性], [活動・表出生], [親密生] が高いことを示す。帰国生群と国内群の評定値に差が見られるか検討するため t 検定を実施した。結果, どの因子にも有意な差は見られなかった。

KFD 印象評定尺度の各因子の得点を投入して階層的クラスタ分析 (ウォード法) を実施した。デンドログラムを参考に, クラスタ数を 5 に設定したところ, 以下のクラスタが生成された (Figure 2)。見受けられる特徴から (Table 6), クラスタ 1 を [環境不安定群], クラスタ 2 を [全低群], クラスタ 3 を [平均群], クラスタ 4 を [安定群], クラスタ 5 を [全高群] と命名した。

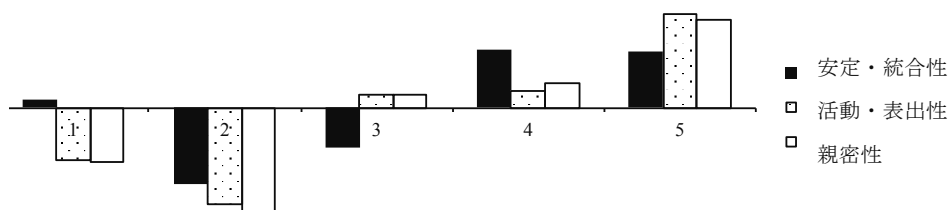


Figure 2. KFD 印象評定尺度の階層的クラスタ分析 (5 クラスタ)

Table 6
各クラスタの名前と特徴

クラスタの名前	推察される特徴
クラスタ1 環境不安定群	家族仲などの環境が不安定な中で、エネルギーは乏しいものの、コントロールする自我などの力は有していることが推察される。
クラスタ2 全低群	[安定・統合性]，[活動・表出性]，[親密性]の3因子とも低く、環境の不安定さや自我の不健康さが特徴であると考えられる。
クラスタ3 平均群	環境は比較的安定的であり、ややエネルギーに乏しい印象は受けるものの、比較的落ち着いたKFDを描く力を有している。
クラスタ4 安定群	[活動・表出性]，[親密性]が平均的，[安定・統合性]が高い。環境は安定的で、活発ではないが家族との交流もあると考えられる
クラスタ5 全高群	[安定・統合性]，[活動・表出性]，[親密性]の3因子とも高く、家族仲も安定しており、健康的な自我を有していると考えられる。

背景要因からクラスタごとの特徴が見られるかを検討するため、それぞれのクラスタに所属する帰国生群と国内群の数を検討した (Table 7)。結果、海外経験の有無による特徴は見られなかった。

Table 7
クラスタと海外経験の有無のクロス表

クラスタ	海外経験		合計 (人)
	国内群	帰国生群	
環境不安定群	14	14	28
全低群	12	17	29
平均群	36	30	66
安定群	30	26	56
全高群	12	16	28
合計	104	103	207

帰国生群に限り、何らかの特徴がクラスタごとに見られるか検討するべく、海外滞在歴を目的変数として分散分析を実施した (Figure 3)。結果、環境不安定群と全低群 ($p<.05$)、環境不安定群と安定群の間に有意差 ($p<.05$) が見られた。このことから、環境不安定群は海外滞在歴が長い帰国生が多く、全低群と安定群には海外滞在歴が比較的短い帰国生が分類されていることが考えられる。

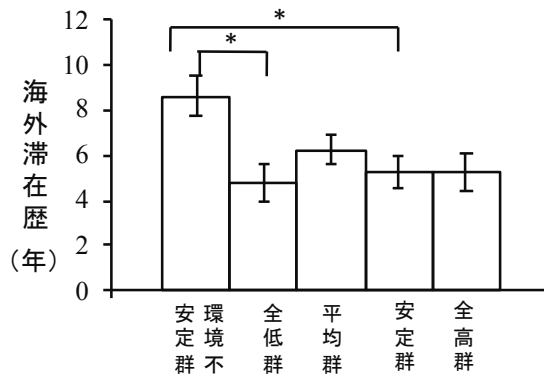


Figure 3. 帰国生群におけるクラスタと海外滞在歴の分散分析

滞在時期においてもクラスタ間で差が見られるか検討するため、各時期の滞在年数を目的変数として分散分析を実施した (Figure4)。結果、幼児期と思春期の滞在歴で有意差は見られなかった。児童期の滞在歴では、環境不安定群と全低群、全低群と平均群の間で有意差が見られた ($p < .05$)。全低群に分類された帰国生は、環境不安定群と平均群よりも児童期の海外滞在歴が短いと考えられる。

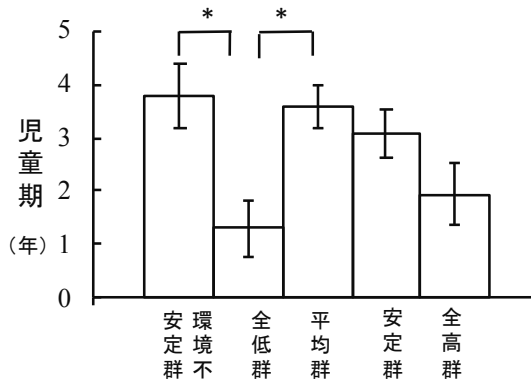


Figure 4. 帰国生群におけるクラスタと児童期の滞在年数の分散分析

各クラスタが民族アイデンティティ、アイデンティティ、精神的健康において特徴を示すか検討するべく、MEIM, MEIS, GHQ それぞれの平均点を目的変数に設定して分散分析を実施した。結果、MEIM 平均点と MEIS 平均点はどのクラスタにも有意差は見られなかった。しかし、GHQ 平均点においては環境不安定群と平均群、全低群と不安定群に有意差 ($p < .05$) が見られた。平均群に所属する帰国生は、環境不安定群と全低群に比べて有意に精神的健康が高いと考えられる (Figure 5)。

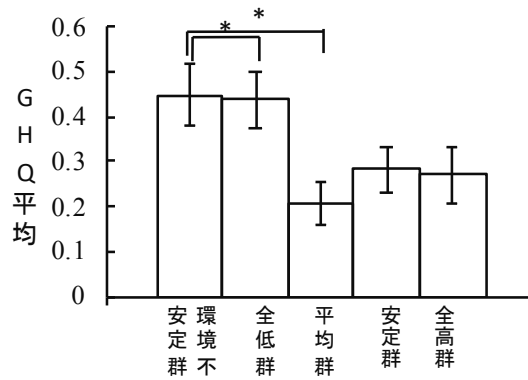


Figure 5. 帰国生群におけるクラスタと GHQ 平均点の分散分析

最後に、先に検討した描画内容の分析の結果によってクラスタの特徴が分かれるか検討するため、帰国生群のみを対象に相関分析を実施した (Table 8)。その結果、全低群において成員が [笑顔] である負の相関が有意に高かった ($p < .01$)。また、全高群において [笑顔] が正の相関で有意に高く ($p < .01$)、[Fa 不穏] の反応も有意に少ないことが示された ($p < .05$)。

Table 8

帰国生群における各クラスタと描画内容の相関分析

	笑顔	Fa不穏	Mo不穏	自分不穏
環境不安定群	-0.046	0.0757	0.0436	0.049
全低群	-.393 **	.102	-.007	.166
平均群	.004	-.120	.100	-.033
安定群	.127	-.112	-.178 +	-.189 +
全高群	.502 **	-.238 *	-.157	-.186 +

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

以上の結果から推察される各クラスタの帰国生群の特徴を Table 9 にまとめる。

Table 9

クラスタごとに想定される帰国生群の特徴

クラスタの特徴	推察される尺度的特徴
環境不安定群	<ul style="list-style-type: none"> ・家族仲などの環境が不安定な中で、エネルギーは乏しいものの、コントロールする自我などの力は有していることが推察される ・海外滞在歴が長い ・児童期の海外滞在歴が長い ・精神的健康度が低い
全低群	<ul style="list-style-type: none"> ・環境の不安定さや自我の不健康さが特徴であると考えられる ・海外滞在歴が短い ・児童期の海外滞在歴が短い ・精神的健康度が低い ・家族仲が悪い傾向
平均群	<ul style="list-style-type: none"> ・環境は比較的安定的で、ややエネルギーに乏しい印象は受けるものの、比較的落ち着いたKFDを描く力を有している ・児童期の海外滞在歴が長い ・精神的健康度が高い
安定群	<ul style="list-style-type: none"> ・環境は安定的で、活発ではないものの家族との交流もある ・海外滞在歴が短い
全高群	<ul style="list-style-type: none"> ・家族仲も安定しており、健康的な自我を有していると考えられる ・父親を含め、家族仲が良い傾向

考 察

研究Ⅱでは、主に家族関係の視点から KFD の特徴と背景要因との関連を検討した。

家族仲が民族アイデンティティと心の安定に及ぼす影響

描画内容と各尺度の相関分析の結果 (Table 4)、民族アイデンティティの達成度が高い者ほど描写されている成員が笑顔であることが多かった。Jacobson (1964) や Phinney & Nakayama (1991) にて、異文化接触を経験した子どもが二次的集団に適応できるかどうかは親との関係が重要であることが示されているが、本研究においても同様の結果が示された。家族関係が良好なほど民族アイデンティティが安定して構築されやすいと考える。また、同分析の結果、アイデンティティの達成度と精神的健康が高いほど [笑顔] の描画が多く、低いほど [自分不穩] が多かった ($p<.05$)。平田・比嘉 (2014) は家族満足度の高い群がポジティブな表情を多く描くことを報告しており、本研究でも同様の結果が反映されたと考える。安定的なアイデンティティ、精神的健康を有しているほど、家族仲が良く、その結果として民族アイデンティティが安定しやすくなることが予測される。

環境不安定群と平均群は、どちらも児童期の海外滞在歴が長い (Table 9)。しかし環境不安定群は

精神的健康が低く、平均群は精神的健康が高いことが示された (Figure 5)。KFD より推察される 2 群の大きな違いとして、家族成員間の交流の乏しさが挙げられる。環境不安定群の KFD では成員間の関わりが乏しく、平均群では比較的安定した交流が描かれていた。同様に、全低群と安定群はどちらも海外滞在歴が短いものの、描かれている KFD には大きな違いがあり、これは家族仲の違いによる影響を大きく受けていることが推察される。最も安定的な KFD を描いた全高群には、海外滞在歴、海外滞在時期に関する背景要因から推察できる特徴は見受けられなかったことから、様々な背景を持つ帰国生が分類されているのではないかと考えられる。以上より、海外滞在の有無、滞在時期、滞在年数に関わらず、心の安定には家族仲の良さが重要であることが示された。

各クラスと民族アイデンティティ、アイデンティティ、精神的健康の分散分析の結果、GHQ 平均点においてのみ有意差が示された (Figure 5)。これは、精神的健康が家族関係というアイデンティティ発達の土台と深く関連していることが影響していると考えられる。家族関係という三者関係以上の中で葛藤を十分に味わうことでその後のアイデンティティ発達に必要な側面が発見されるようになる (橋本他, 1999)。家族関係に問題を有している場合、集団アイデンティティを含め、様々な問題へと発展しうる。その家族関係という土台と最も関連が深い精神的健康が、今回の分散分析にて有意差が生じたものと考えられる。

児童期の海外滞在と母子の関係・家族との関係

描画内容と滞在時期の相関分析の結果 (Table 5)、有意傾向ではあったものの、[児童期] の海外滞在歴が長いほど [Mo 不穩] が多かった。研究 I より、[児童期] に長く海外へ滞在していた場合は日本人としての民族アイデンティティが確立しにくくなることが示された。母親が子どもの二次的集団への所属を妨害した事例 (Defontaine, 1991 ; 渋沢, 1993) や、新しい文化に適応しやすい時期が 15 歳までであるとした箕浦 (2003) から、両親は子どもより異文化適応が困難であると考えられる。箕浦 (1980) も「親は仮住まい、子は本住まい」と異国暮らしの捉え方が親子で異なることを表現している。夫婦間でも異文化接触に関する違いが報告されており、女性は男性と異なる特徴を持つことを示している (Piper & French, 2011)。本研究の対象者の母親は、夫の転勤について行っていることが多いことが推察される。酒井 (2013) は、母親や妻の抱く葛藤は夫や親族をはじめとして、周囲と共有されにくいことを報告している。父親は転勤後も会社という居場所があるが、母親は家族以外に知り合いのいないことが多い。このような背景要因が合間って、[児童期] に長く海外へ滞在していた場合ほど [Mo 不穩] が多く描かれたことが推察される。

[Fa 不穩], [Mo 不穩], [自分不穩] 間に相関が見られた (Table 5)。家族内で機能不全等のトラブルが生じた場合、家族全体に影響を及ぼすことが示唆された。特に異文化接触は、それまで滞在していた場所との関係性を喪失し、連続した関係が家族のみとなる場合が多い。家族外とのつながりが薄くなりやすい中で、トラブルが家族全体に影響を及ぼすことは容易に想像できるだろう。

海外滞在が発達段階に与える影響

描画内容と各尺度との相関分析の結果、国内群よりも帰国生の [グッドイナフ] が低く、帰国生群の発達の遅れが推察された (Table 4)。Erikson (1964) は異文化接触を危機であると説明しており、子どもの頃の文化間移動は発達段階に影響を及ぼすことも指摘されている (Pollock & Van Reken,

1999)。本結果からも、子どもの頃の異文化接触経験が発達に影響を及ぼす可能性が窺える。しかし、文化ごとの描画スキルが影響している可能性も考えられる。Freeman (1980) は、文化圏によって子どもが好んで描くパターンや形が異なることを報告している。進藤 (2013) は「通常の描画発達に要する前提条件は、ある程度の描画経験を持つことや他者の描画に接することが求められる」と述べている。日本は漫画やアニメが浸透しており、幼い頃から絵を描いて遊ぶ子どもが多いため、巧みな人物画を描く者が多い可能性が推察される。この点に関して、今後検討が必要であると考えられる。

研究Ⅱのまとめ

研究Ⅱでは、家族仲と民族アイデンティティとの関連について検討した。結果、異文化接触の長さや時期に関わらず、家族仲が良いほど民族アイデンティティは安定しやすく、アイデンティティと精神的健康も安定しやすくなることが示された。また、社会化に重要とされている児童期に長く海外へ異文化接触することで、新しい環境に馴染めない母親との関係性に不和が生じる可能性も示唆された。子どもだけでなく家族全体をサポートする大切さが示唆された。

総合考察

全体の考察

本研究は、思春期以前に1年以上海外へ滞在した経験を持つ帰国生を対象に、民族アイデンティティの視点から研究を行なった。量的調査を行なった研究Ⅰからは、2つの考察がなされた。第1に、児童期に異文化接触を行うと日本人としての民族アイデンティティが発達しにくくなることが示唆された。児童期とは、周りの同年代と同じであることに安心感を覚える時期であり、社会化に重要な時期である。そのような時期に長く海外へ住むことで、外国人としてのアイデンティティとなる糧が構築されやすいことがこの結果に影響していると考えられる。第2に、帰国生のアイデンティティ発達のために民族アイデンティティが重要な要因となることが示唆された。国籍が日本で、両親が日本人である以上、思春期以降にアイデンティティを達成していくためには日本人としての民族アイデンティティは切っても切り離せない側面なのであろう。

家族関係に関する視点から考察を行った研究Ⅱより、家族仲の良さが子どものアイデンティティ等の安定に重要であることが先行研究同様に示された。そのような家族においては、日本人としての民族アイデンティティも構築されやすくなると考えられる。しかし、児童期に長く海外へ滞在した帰国生は、母親との関係性が悪くなりやすいことも推察された。異文化に適応していく柔軟性は、大人よりも子どもの方が高い。父親の転勤により異文化接触が行われている場合、父親には会社に居場所があるが、母親は所属するコミュニティが家族しかない場合が多い。児童期に長く海外へ住むと外国人として社会化がなされやすいことが研究Ⅰより示されたが、新しい文化に馴染めない母親がそのような子どもをありのまま受け入れられないことは容易に想像がつく。そのような背景が影響してか、児童期に長く海外へ滞在している者は、母親を不穏に描写する傾向が高かった。

以上の結果から、日本においても先行研究と同様に、児童期という社会化に重要な時期に異文化接触という危機的な体験をする際は、適応的に成長するために家族や周囲のサポートを含む、安定した環境が重要となることが示された。

本研究で得られた知見は、児童期の子どもがいる家族が海外へ移動する場合、事前に心理教育を行う際に有用である。心理教育の案として、児童期の異文化接触がアイデンティティの混乱に繋がりがやすい体験であること、マイノリティ青年にとって民族アイデンティティが重要であることを伝え、両親は子どもが適応していくためにどうすれば良いかという視点から子どもをサポートすることが大切であると伝える。また、子どもより成人の適応に時間がかかることから、両親の苦労も弱い家族全体をサポートすることが大切であろう。

今後の課題

今後は対象者の帰国後の年数を統制する必要があると考える。帰国後の年数によって、日本に適応していく際の民族アイデンティティの重要性が異なることが考えられるためである。本研究では、帰国生のアイデンティティ発達に民族アイデンティティが重要となる可能性が示唆された。しかし、結果はあくまでも有意傾向であり、精神的健康度との関連も示されなかった。

引用文献

- 阿部 祐 (2001) . 多文化間メンタルヘルスの動向と実践 順天堂大学 スポーツ健康科学研究, 5, 1-7.
- Adler, P.S. (1975). The transitional experience: An alternative view of culture shock. *Journal of Humanistic Psychology*, 4, 13-23.
- Burns, R.C., & Kaufman, S.H. (1970). *Kinetic family drawings (K-F-D): An introduction to understanding children through kinetic drawings*. Runner/ Mazel.
- Defontaine, J. (1991). Awaiting identity. *Revue Francaise de Psychanalyse*, 55(6), 1771-1777.
- Downie, M., & Koestner, R. (2004, June). The centrality of heritage acceptance in the daily interactions of tricultural individuals. Paper presented at the 65th Annual Convention for the Canadian Psychological Association, St. John's, Newfoundland, Canada.
- 江淵一公 (1983) . 子供達の異文化接触 小林哲也(編著) 異文化に育つ子供たち 有斐閣選書 p.2-28
- 江淵一公 (2002) . バイカルチュラリズムの研究-異文化適応の比較民族誌- 九州大学出版会
- Erikson, E.H. (1959). *Identity and Lifecycle*. New York: Norton. (小此木啓吾・小川捷之・岩男寿美子 (訳) (1973). 自我同一性-アイデンティティとライフサイクル- 誠信書房)
- Erikson, E.H. (1964). *Insight and responsibility*. New York: Norton. (鐘幹八郎 (訳) (2018) 洞察と責任 [改訳版]: 精神分析の臨床と倫理 誠信書房)
- Freeman, N.H. (1980). *Strategies of representation in young children*. London: Academic Press.
- 外務大臣領事局政策課編 (2017) . 海外在留邦人数調査統計 平成 19 年度最新版 国立印刷局
- Gerner, M., Perry, F., Moselle, M.A., & Archbold, M. (1992). Characteristics of internationally mobile adolescents. *Journal of School Psychology*, 30, 197-214.
- Goldberg, D.P. (1972). *The Detection of Psychiatric Illness by Questionnaire*. London: Oxford University Press.
- 平田幹夫・比嘉紀枝 (2014) . 小学生の家族満足度と動的家族描画 (KFD) の検討 琉球大学教育学

- 部教育実践総合センター紀要, 21, 155-161.
- Hoersting, R.C., & Jenkins, S.R. (2011). No place to call home: Cultural homelessness, self-esteem and cross-cultural identities. *International Journal of Intercultural Relations*, 35(1), 17-30.
- Hogg, M.A., & Mullin, B.A. (1999). Joining groups to reduce uncertainty: Subjective uncertainty reduction and group identification. In D. Abrams, & M.A. Hogg (Eds.), *Social identity and social cognition* (pp.179-249). Oxford, UK: Blackwell.
- Hong, Y.Y., Morris, M.W., Chiu, C.Y., & Benet-Martinez, V. (2000). Multicultural minds: A dynamic constructivist approach to culture and cognition. *American Psychologist*, 7, 709-720.
- 岩崎未来 (2008) . インターナショナルスクール選択者の文化習得に関する一考察—シンガポールに暮らす日本人一時滞在者の事例を通して— 御茶ノ水女子大学グローバル COE プログラム「格差センシティブな人間発達科学の創成」公募研究成果論文集, 57-63.
- Jacobson, E. (1964). *The self and The Object World*. New York: International Universities Press. (伊藤洗 (訳) . (1981) . 自己と対象世界—アイデンティティの起源とその展開— 現代精神分析双書 6, 小此木啓吾, 西園昌久監修, 誠信書房, 東京) .
- 河合隼雄・藤縄真理子 (1980) . 在外日本人の適応・不適応についての臨床心理学的調査 星野 命 (編) 現代のエスプリ 161:カルチャーショック 至文堂
- Kim, H.A. (1976). Transplantation of psychiatrists from foreign cultures. *Journal of the American Academy of Psychoanalysis*, 4(1), 105-112.
- 近藤 祐 (1981) . カルチャー・ショックの心理—異文化と付き合うために— 大阪: 創元社.
- LaFromboise, T., Coleman, H., & Gerton, J. (1993). Psychological impact of biculturalism: Evidence and theory. *Psychological Bulletin*, 114, 395-412.
- Lee, R.M., & Yoo, H.C. (2004). Structure and measurement of ethnic identity for Asian American college students. *Journal of Counseling Psychology*, 51, 263-269.
- LeTender, G.K. (2000). *Learning to be adolescent: Growing up in U.S. and Japanese middle schools*. New Haven, CT: Yale University Press.
- McCaig, N.M. (1996). Understanding global nomads. In C. Smith (Ed.), *Strangers at home* (pp.99-120). New York: Aletheia Press.
- McDonald, K.E. (2010). Transculturals: Identifying the Invisible Minority. *Journal of Multicultural Counseling Development*, 38(1), 38-50.
- Mendelberg, H. (1986). Identity conflict in Mexican-American adolescents. *Adolescence*, 21, 215-222.
- 箕浦康子 (1980) . 親と子の異文化体験 サイコロジー, 11, 60-65.
- 箕浦康子 (2003) . 子供の異文化体験 増補改訂版. 新思索社.
- Morschauer, E.J., & Chescheir, M.W. (1982). Identity and community relocation. *Social Casework*, 63(9), 554-560.
- 中川泰彬・大坊郁夫 (1985) . 日本語版 GHQ 精神健康度調査手引き 日本文化科学社.
- 中根千枝 (1972) . 適応の条件—日本的連続の思考— 東京: 講談社現代新書.

- Nathanson, J.Z., & Marcenko, M. (1995). Young adolescents & adjustment to the experience of relocating overseas. *International Journal of Intercultural Relations*, 19, 413-424.
- 延島信也 (1963) . 離人症症状を持つ一混血女子の精神療法的研究—特に national identity と identifications conflict の問題をめぐって— 精神分析研究, 10, 5-19.
- Oberg, K. (1960). Culture shock: Adjustment to new cultural environment. *Practical Anthropology*, 7, 177-182.
- Ong, A.D., Phinney, J.S., & Denis, J. (2006). Competence under challenge: Exploring the protective influence of parental support and ethnic identity in Latino college students. *Journal of Adolescence*, 29, 961-979.
- 大塚芳子 (1992) . 帰国直後の不適応 臨床心理学体系第 10 卷. 安香 宏・小川健之・空井健三 (編) 金子書房, pp.139-152.
- 大和田攝子・阪 永子 (2007) . 動的家族がにおける被虐待児の描画特徴：印象評定を用いた分析 神戸松蔭女子学院大学研究紀要人文科学・自然科学篇, 48, 1-15.
- 小澤理恵子 (2000) . 異文化間移動に伴う青年期のアイデンティティの危機の内容の分析 日本教育心理学会総会発表論文集, 42, 26.
- Parham, T., & Helms, J. (1985). Relation of racial identity attitudes to self-actualization and affective states of Black students. *Journal of Counseling Psychology*, 32, 431-440.
- 朴 エスター (2011) . 韓国の帰国生の学校生活におけるストレスと滞在国による差異 人間文化創成科学論集, 14, 107-116.
- Phinney, J.S. (1990). Ethnic identity in adolescents and adults: review of research. *Psychological Bulletin*, 108, 499-514.
- Phinney, J.S. (1991). Ethnic identity and self-esteem: A review and integration. *Hispanic Journal of Behavioral Sciences*, 13, 193-208.
- Phinney, J.S. (1992). The multigroup ethnic identity measure: A new scale for use with diverse groups. *Journal of Adolescent Research*, 7, 156-176.
- Phinney, J.S., Jacoby, B., & Silver, C. (2007). Positive intergroup attitudes: The role of ethnic identity. *International Journal of Behavioral Development*, 31, 478-490.
- Phinney, J.S., Lochner, B., & Murphy, R. (1990). Ethnic identity development and psychological adjustment in adolescence. In A. Stiffman & L. Davis (Eds.), *Ethnic issues in adolescent mental health* (pp.53-72). Newbury Park, CA: Sage.
- Phinney, J.S., & Nakayama, S. (1991). *Parental influences on ethnic identity formation in minority adolescents*. Paper presented at the biennial meeting of the Society for Research in Child Development, Seattle, WA.
- Piper, N., & French, A. (2011). *Do Women Benefit from Migration?: An Editorial Introduction*. Diversities, 13(1), UNESCO.
- Pollock, D.C., & Van Reken, R. (1999). *Third culture kids: The experience of growing up among worlds*. Yarmouth, ME: Intercultural Press.
- Pollock, D.C., & Van Reken, R. (2001). *Third culture kids: The experience of growing up among worlds*.

- Yarmouth, ME: Nicholas Brealey/ Intercultural Press.
- Roberts, E.R., Phinney, J.S., Masse, L.C., Chen, Y.R., Roberts, C.R., & Romero, A. (1999). The Structure of ethnic identity of young adolescents from diverse ethnocultural groups. *Journal of Early Adolescence*, 19, 301-322.
- Ryder, A.G., Alden, L.E., & Paulhus, D.L. (2000). Is acculturation unidimensional or bidimensional? A head-to-head comparison in the prediction of personality, self-identity, and adjustment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 49-65.
- 酒井千絵 (2013) . 上海の多文化家族—中国人配偶者と上海で暮らす日本人女性を中心に— 関西大学社会学部紀要, 45(1), 47-72.
- 渋沢田鶴子 (1993) . 異文化とアイデンティティ—帰国子女の症例をとおして— 精神分析研究, 37(1), 114-120.
- 渋谷真樹 (2000) . マイノリティ集団内部の多様性と力関係—帰国子女教育学級に在籍する「帰国生」らしくない「帰国生」に着目して— 御茶ノ水女子大学ジェンダー教育センター年報, 3, 149-162.
- 進藤将敏 (2013) . 幼児における描画発達研究の概観と展望 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 62(1), 217-234.
- 白土 悟 (2004) . 異文化間カウンセリングの今日的課題 異文化間教育, 20, 4-10.
- Sussman, N.M. (2000). The dynamic nature of cultural identity throughout cultural transitions: Why home is not so sweet. *Personality and Social Psychology Review*, 4, 355-373.
- 鈴木 満・立見康彦・太田博昭 (編) (1997) . 法人海外渡航者の精神保健対策—欧米地域を中心とした活動の記録— 東京: 信山社
- 高橋雅春・高橋依子 (1986) . 樹木画テスト 文教書院
- 谷 冬彦 (2001) . 青年期における同一性の感覚の構造—多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成—教育心理学研究, 49, 265-273.
- 塘 利枝子・廿日出里見・小澤理恵子・鈴木一代 (2008) . 文化間移動とアイデンティティ形成—生涯発達の視点から (自主シンポジウム H6) — 日本教育心理学会第 50 回総会発表論文集 (pp.S144-145) .
- 植松晃子 (2008) . 異文化における心理的サポートについての理論的考察—新たなパラダイムの提案— お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学論業, 11, 175-182.
- 植松晃子 (2010) . 異文化環境における民族アイデンティティの役割—集団アイデンティティと自我アイデンティティの関係— パーソナリティ研究, 19(1), 25-37.
- 植松晃子 (2015) . 異文化接触における民族アイデンティティの役割—自我アイデンティティとの関連から— 風間書房
- Vivero, V.N., & Jenkins, S.R. (1999). The existential hazards of the multicultural individual: Defining and understanding “cultural homelessness”. *Cultural Diversity and Ethnic Minority Psychology*, 5, 6-26.
- 山口悠希子 (2007) . ドイツで育った日本人青年たちの日本語学習経験—海外に暮らしながら日本

語を学ぶ意味— 阪大日本語研究, 19, 129-159.

山本 力 (1984) . アイデンティティ理論との対話—Erikson における同一性概念の展望— 鐘 幹
八郎・山本 力・宮下 一博 (編著) アイデンティティ研究の展望I ナカニシヤ出版, pp.9-38.

Yasui, M., Durham, C.L., & Dishion, T.J. (2004). Ethnic identity and psychological adjustment: A validity
analysis for European American and African American Adolescents. *Journal of Adolescent Research, 19*,
807-825.

Yip, T., & Fuligni, A.J. (2002). Daily variation in ethnic identity, ethnic behaviors, and psychological well
being among American adolescents of Chinese descent. *Child Development, 73*, 1557-1572.